



甲虫ニュース

No. 146
June 2004

COLEOPTERISTS' NEWS



日本産ツツキノコムシ科検索図説 V^{注1}

——ツツキノコムシ族④ (エブリコヒメツツキノコムシ属, ポリアヒメツツキノコムシ属, アラゲツツキノコムシ属, フタツノツツキノコムシ属, フタツノツヤツツキノコムシ属, ノコアシツツキノコムシ属)——

川 那 部 真

1-6. エブリコヒメツツキノコムシ属 *Dolichocis* DURY, 1919

触角が9節, 体は細長いが全体的に丸みがある, 前胸背板は前方でやや狭まり前胸の幅は上翅より狭い, 前脚脛節の外角が突出しない, などの特徴を具える. エグリツツキノコムシ属 *Ennearthron* に似るが, ♂頭楯は三角状の突起がなく単純である. 日本に1種, ヨーロッパに1種, 北米に2種が分布する.

1-6-1. エブリコヒメツツキノコムシ *Dolichocis yuasai* (CHŪJŌ, 1941)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 30.

体長1.5~1.8 mm. 体が赤褐色でエグリツツキノコムシ属の種に似るが, ♂の二次性徴は腹部腹板の腹孔だけで, 前胸背板や頭楯に三角状の突起がない. LAWRENCE (1971) によってエグリツツキノコムシ属から所属が変更された. まれ. 分布: 北海道. 寄主菌: エブリコ.

1-7. ポリアヒメツツキノコムシ属 *Anoplocis* KAWANABE, 1996

触角が9節, 体は細長く両側がほぼ並行, 前胸背板は方形に近く上翅の幅とほぼ同じ, 前脚脛節の外角が突出しない, などの特徴を具える. 一見するとホソツツキノコムシ属 *Orthocis* に似るが, 上翅末端に屈曲縁を欠く. 現時点では下記の2種が知られるだけである. 樹皮に薄く張り付いて生育するアナタケ(傘型やサルノコシカケ型の子実体を形成しない)に集まるのは, おもに本属の種である. かつては本属の種の他にも, エブリコヒメツツキノコムシなど触角が9節である多くの種がエグリツツキノコムシ属に含まれていた.

種への検索

1. 体は暗褐色. 前胸前角は, 横から見ると前縁をわずかに越える. 前胸背板の点刻は密で, 点刻間の距離は点刻直径の1~1.5倍. 通常 PL/PW は0.81以上.ポリアヒメツツキノコムシ
- 体は黒色. 前胸前角は, 横から見ると前縁を越えない. 前胸背板の点刻は疎で, 点刻間の距離は点刻直径の1.5~2.5倍. 通常 PL/PW は0.8以下.ミナミノポリアヒメツツキノコムシ

1-7-1. ポリアヒメツツキノコムシ *Anoplocis poriae* (NAKANE et NOBUCHI, 1955)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 30; KAWANABE, 1996, *Elytra*, 24: 332 [再記載].

体長1.18~1.45 mm, 上翅幅0.49~0.6 mm. 種名の *poriae* は, 寄主菌であるアナタケにかつて用いられていた属名 *Poria* にちなむ. 少ない. 分布: 本州, 四国, 対馬. 寄主菌: アナタケ.

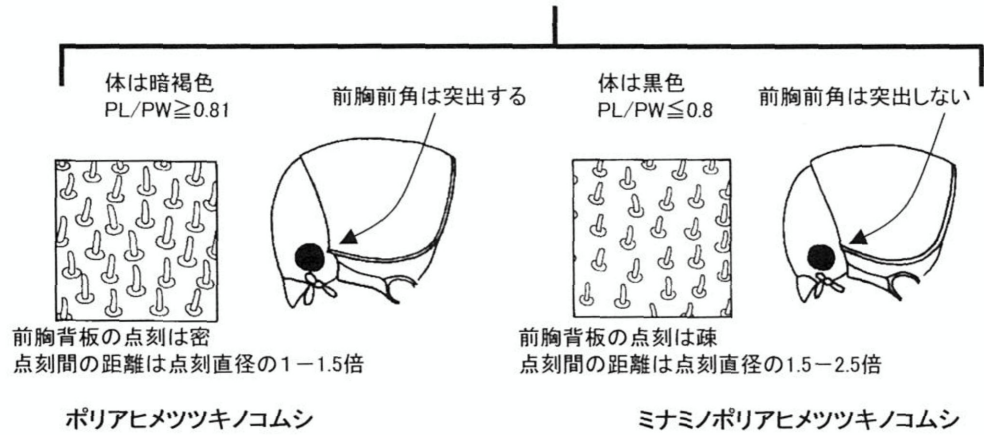
1-7-2. ミナミノポリアヒメツツキノコムシ *Anoplocis ryukyuensis* KAWANABE, 1996

KAWANABE, 1996, *Elytra*, 24: 333.

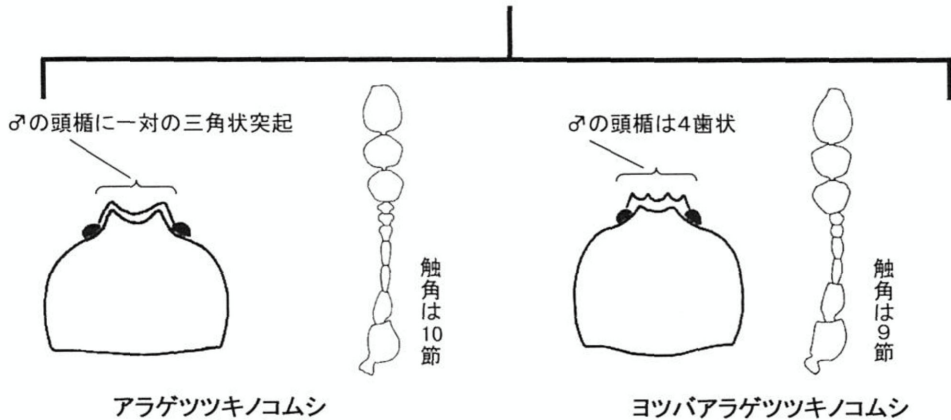
体長0.96~1.23 mm, 上翅幅0.42~0.53 mm. ポリアヒメツツキノコムシに酷似するが, 成熟個体では体が

^{注1} Makoto KAWANABE: An illustrated guide to identification of ciid beetles of Japan, V.

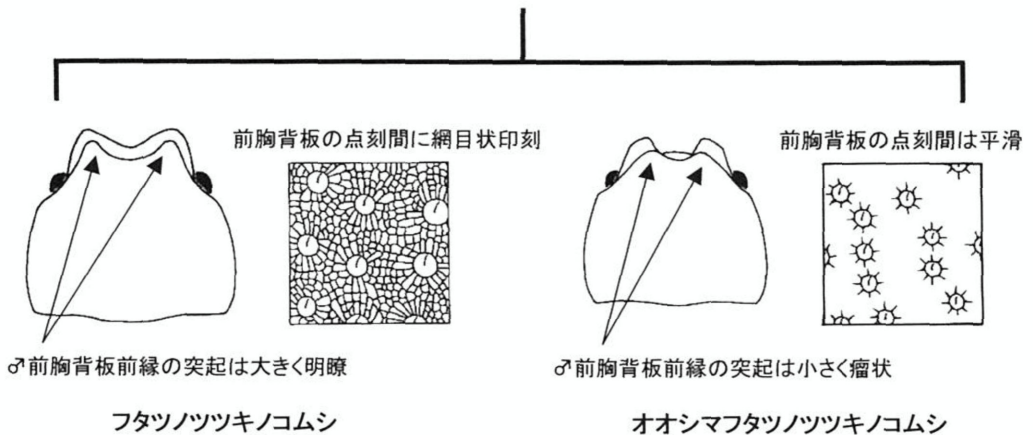
ポリアヒメツツキノコムシ属の種への検索



アラゲツツキノコムシ属の種への検索



フタツノツツキノコムシ属の種への検索



黒いので一見して区別できる。細部では、横から見ると前胸前角が前縁を越えないことや、前胸背板の点刻が疎であること(点刻間の距離は点刻直径の1.5~2.5倍)、前胸がより幅広いこと(PL/PW ≤ 0.8)などの違いがある。琉球列島以南にはポリアヒメツキノコムシの代わりに本種が分布しており、生態的にもよく似る。少ない。分布：南西諸島。寄主菌：アナタケ。

1-8. アラゲツツキノコムシ属 *Acanthocis* MIYATAKE, 1954

前胸突起は薄く、横から見ると前胸腹板中央部の高さよりもはるかに突出しているため、他の属との区別は容易である。♂は二次性徴として頭楯と前胸背板に極めて顕著な一对の三角状突起を具えるが、腹部腹板には腹孔を欠く。触角が9節の種と10節の種がある。現時点では下記の2種が知られるだけである。

種への検索

- 1. 体は赤褐色で多少とも細長く、EL/EWは1.24以上。触角は10節。♂の頭楯は両側に三角状突起がある。.....アラゲツツキノコムシ
- 体は暗褐色で頑強、EL/EWは1.21以下。触角は9節。♂の頭楯は両側に三角状突起があり、さらにその内側に2つの小さな円錐状突起を具えるため4歯状になる。.....ヨツバアラゲツツキノコムシ

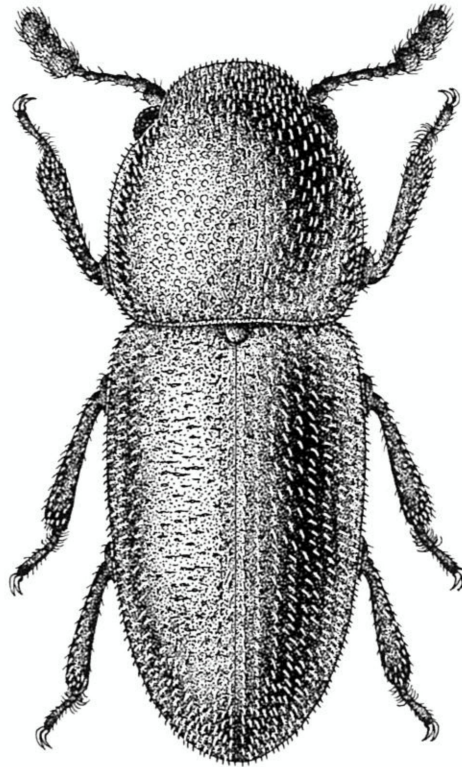


図1. ミナミノポリアヒメツツキノコムシ *A. ryukyensis* (KAWANABE, 1996bより).

1-8-1. アラゲツツキノコムシ *Acanthocis inonoti* MIYATAKE, 1955

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 283, No. 26.

体長1.77~2.19 mm, 上翅幅0.92~1.06 mm. 背面は、黄褐色でやや傾いた太短い剛毛と、茶褐色で直立した細長い剛毛で被われる。前胸背板と上翅の剛毛はほぼ同質であるが、上翅では部分的に剛毛列を形成する。前胸は著しく膨隆する。♂の頭楯には一对の強く反り返った三角状突起を具え、前胸背板前縁にも同様の突起がある。少ない。分布：本州、四国。寄主菌：カワウソタケ。

1-8-2. ヨツバアラゲツツキノコムシ *Acanthocis quadridentatus* NOBUCHI et WADA, 1959

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 283, No. 26.

体長1.54~2.48 mm, 上翅幅0.83~1.24 mm. アラゲツツキノコムシに似るが、体は暗褐色で太く(EL/EW ≤ 1.21)、触角が9節であることにより区別できる。♂の頭楯は一对の三角状突起に加え、さらにその内側に一对の小さな円錐状突起を具えるため、4歯状になる。なお、原記載では触角が10節と書かれているが正しくない。南西諸島では普通。分布：四国、九州、南西諸島。寄主菌：ネンドタケ、ブドウタケ。

1-9. フタツツキノコムシ属 *Neoenearthron* MIYATAKE, 1954

触角は9節、前脚脛節の外縁は細かい鋸歯状になる。触角球桿の末端節にある4個の感覚孔のうち1個が節の先端部にある。前胸腹板の中央部は膨らむが縦の隆起線はない。♂は二次性徴として頭楯と前胸背板に一对の三角状ないし瘤状突起を具え、腹部腹板に腹孔を持つ。現時点では3種が知られており、日本には下記の2種、フィリピンルソン島には *N. sakaii* KAWANABE, 1994 がそれぞれ分布する。

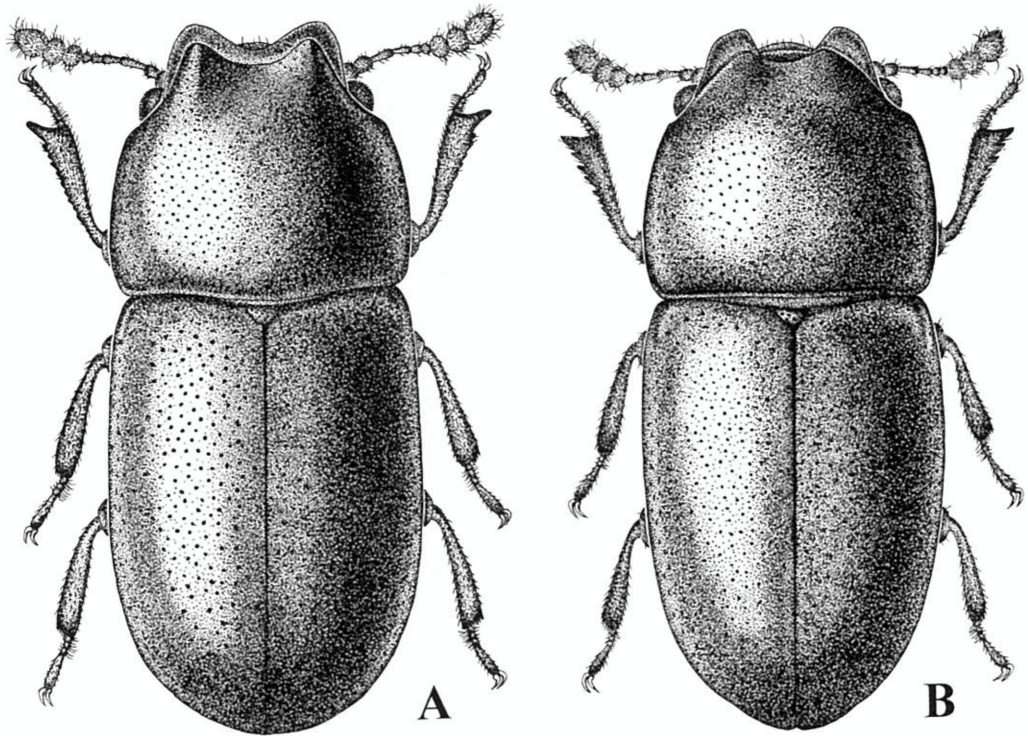


図2. フタツノツツキノコムシ属2種——A, フタツノツツキノコムシ *N. bicarinatum*; B, オオシマフタツノツツキノコムシ *N. hisamatsui* (いずれも KAWANABE, 1994c より).

種への検索

1. 前胸背板表面の点刻と点刻の間は微細な網目状印刻で被われる。♂の頭楯は両側に三角状突起を具え、前胸背板前縁の突起は大きく明瞭。……………フタツノツツキノコムシ
- 前胸背板表面の点刻と点刻の間は平滑で網目状印刻を欠き、点刻の周囲は放射状に印刻される。♂の頭楯は両側に台形ないし半円形の葉片状突起を具え、前胸背板前縁の突起は小さく瘤状。……………オオシマフタツノツツキノコムシ

1-9-1. フタツノツツキノコムシ *Neoenarthron bicarinatum* MIYATAKE, 1954

北隆館『原色昆虫大図鑑 II』p. 216, No. 25; 保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 283, No. 27; KAWANABE, 1994, *Kontyû*, 62: 645 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.39~2.28 mm, 上翅幅 0.68~1.05 mm. 前胸背板は小さいが明瞭な点刻を密に装う。点刻と点刻の間は微細な網目状印刻で被われるため、顕著な被毛がないにもかかわらず光沢がない。♂の頭楯は両側に三角状突起を具え、前胸背板前縁も一対の隆起した太い突起を形成する。普通。分布: 本州, 四国, 九州。寄主菌: サジタケ, カワウソタケ, ダイダイタケ, ネンドタケ。

1-9-2. オオシマフタツノツツキノコムシ *Neoenarthron hisamatsui* MIYATAKE, 1959

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 283, No. 27; KAWANABE, 1994, *Kontyû*, 62: 647 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.29~1.82 mm, 上翅幅 0.61~0.85 mm. 前胸背板の点刻と点刻の間は平滑で網目状印刻を欠くため、光沢が強い。点刻の周囲には放射状の印刻がある。♂の頭楯は両側に台形~半円形の葉片状突起を具え、前胸背板前縁の突起は小さくて不明瞭。フタツノツツキノコムシとは外見がかなり異なる。四国と九州南岸沿いでは多くないが、南西諸島では比較的普通。分布: 四国, 九州, 南西諸島。寄主菌: オオスルメタケ, *Oxyporus* sp.

『原色日本甲虫図鑑 III』ではアマミフタツノツツキノコムシ *N. amamense* MIYATAKE と記載されているが、そのような種は存在しない。これは本種のことを指しており、和名および学名はオオシマフタツノツツキノコムシ *N. hasamatsui* が正しい。

1-10. フタツノツツキノコムシ属
Euxestocis MIYATAKE, 1954

触角は10節。前脚脛節の外縁は鋸歯状で5~10歯を具え、先端外角は1歯状。前胸腹板の中央部は強く膨らみ縦に隆起線を形成する。体背面の光沢が強い。フタツノツツキノコムシ属に多少とも似るが、触角球桿の末端節にある4個の感覚孔はいずれも節の先端から等位置にある。現時点では3種が知られており、日本にはフタツノツツキノコムシ、台湾に *E. formosanus* MIYATAKE, 1982、マレー半島に *E. satoi* KAWANABE, 2003 がそれぞれ分布する。

1-10-1. フタツノツツキノコムシ
Euxestocis bicornutus MIYATAKE, 1954

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 282, No. 21; KAWANABE, 2003, Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol., Tokyo, (6): 304 [♂交尾器他]。

体長1.29~1.79 mm, 上翅幅0.6~0.78 mm。体背面はきわめて平滑で光沢が強い。♂は頭楯の両側に三角状の突起を具え、各頂点付近が多少えぐられるために4波状に見える。また、突起の先端付近には毛の束のついた感覚孔がある。前胸背板前縁には一対の隆起した小突起を具える。各地に普通。分布：本州、四国、九州、対馬、南西諸島。寄主菌：ヒトクチャタケ、レンガタケ、マンネンタケ、オオスルメタケ、ベッコウタケ、エビウラタケ、センベイタケ、*Perenniporia* sp。

1-11. ノコアシツツキノコムシ属 *Dichodontocis* KAWANABE, 1994

触角は10節。フタツノツツキノコムシと同様に前脚脛節の外縁は鋸歯状で5~10歯を具えるが、先端外角は2歯状。前胸腹板の中央部はわずかに膨らむが縦の隆起線を欠く。体背面は列状に並んだ剛毛で被われる。現時点では、下記のノコアシツツキノコムシ1種が知られるだけである。

1-11-1. ノコアシツツキノコムシ *Dichodontocis uncinatus* KAWANABE, 1994

KAWANABE, 1994, Kontyû, 62: 187.

体長1.29~1.6 mm, 上翅幅0.58~0.71 mm。上翅は大小2種類の点刻で被われ、大きい方は縦列状に並んで直立した太い剛毛を装うため、剛毛列が形成される。小さい方は大きい点刻列の間であって傾いた細毛を装う。♂の頭楯は両側に三角状突起を具え、前胸背板前縁にも一対の隆起した突起を形成する。四国と九州では南岸沿いに分布する。少ない。分布：四国、九州、南西諸島。寄主菌：オオスルメタケ、*Phellinus* sp., *Perenniporia* sp。

((株)人と自然の環境研究所)

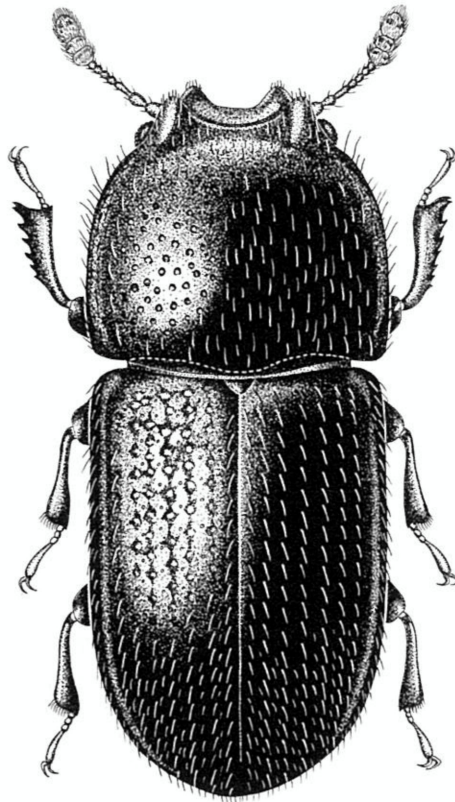


図3. ノコアシツツキノコムシ *D. uncinatus* (KAWANABE, 1994a より)。

吉田 晶さんのご逝去を悼む

上野 俊一

In Memoriam Akira YOSHIDA

(5 July 1914 – 19 Oct. 2003)

Shun-Ichi UENO

第2次世界大戦後の激動期に、ゴミムシ類やハネカクシ類研究の先覚者として活躍され、奥多摩、秩父地方の石灰洞8ヵ所を調査して、この地域の洞窟甲虫相の一端を明らかにされた吉田 晶さんが、2003(平成15)年10月19日に、横行結腸癌で亡くなりました。享年89歳でした。謹んで哀悼の意を表します。



2001年1月1日撮影
目黒区碑文谷のお宅で

吉田さんは、1914(大正3)年7月5日に、吉田辰次さんの長男として東京でお生まれになり、1932(昭和7)年3月に東京市立第二中学校を卒業され、その翌年(1933)の4月に、東京農業大学予科へ入学されました。1935(昭和10)年3月に予科を修了されて4月に農学部へ入学、1938(昭和13)年3月に農学部動物科をご卒業になり、同10月に中等教員農業科動物科教員免許を取得されています。また、ご卒業後すぐに、横浜にあった米国農務省昆虫局東洋出張所へお勤めになりましたが、11月末でおやめになっています。

甲虫類に関する吉田さんのご興味は、東京農業大学ご在学中に、安立綱光講師(当時)やとくに矢野宗幹博士(農林省林業試験場)の薫陶を受けて深められたものようです。最終学年の1937(昭和12)年10月に、神奈川県平塚市の相模川の洪水で採集されたハネカクシ類のうちの4種と、同年の7月に徳島県の剣山で採集されたハネカクシの1種が、のちに(1955年)新種と判定され、東洋大学へ移られていた安立教授(当時)によって記載命名されました。それまでに日本から知られていたアリガタハネカクシ亜科の甲虫類は99種あったのですが、そのうちの5新種のすべてが吉田さんの採集品に基づくもので、うち2種にはそれぞれ *Scopaeus yoshidai* ADACHI ヨシダクビボソハネカクシおよび *Lathrobium (Lobrathium) yoshidai* ADACHI ヨシダナガハ

ネカクシという新名が与えられました* また、当時の日本ではもっとも著名なゴミムシ類の収集家であった矢野由雄氏と親交があり、その縁で神戸在住の J. E. A. LEWIS 氏を通じて、アジアのゴミムシ類研究者として有名な H. E. ANDREWES 氏とも連絡がありました。1931 年 7 月に上高地で採集されたミズギワゴミムシの一種が、Fritz NETOLITZKY によって新種だと判定された、という報せの手紙が残っています。

しかし、戦雲が急を告げるとともに、吉田さんのお姿は虫屋の世界から消えてしまいます。詳しいことは戦時機密のためによく判りませんが、1939 (昭和 14) 年 3 月、現役兵 (通信兵) として入営され、翌 1940 年 11 月、現役満期と同時に召集、陸軍少尉として旧満州へ赴任されます。最初は新京 (現在の長春) にいらっしたようですが、1942 (昭和 17) 年 8 月には、陸軍中尉として牡丹江の第 7585 部隊で、山下奉文中将 (当時) 直属の通信所長などをお務めになりました。1943 年 12 月、結核のためにいったん召集解除になり、1944 (昭和 19) 年 4 月から神奈川県立秦野中学校に奉職されて、生物の教鞭をおとりにりましたが、同年 8 月末にはふたたび召集、陸軍大尉に昇任されて船舶情報隊付となり、1945 (昭和 20) 年 9 月に召集解除で秦野中学校へ復職されるまで、軍務にお就きになりました。旧満州におられたあいだも、余暇に昆虫を採っていらっしたようで、標本の一部が残されています。

1948 (昭和 23) 年 3 月、学制改革で旧制中学校が分割再編されると、秦野中学校から横浜緑ヶ丘高等学校へ転任され、1982 (昭和 57) 年 3 月末で退任されるまで、35 年間にわたって同校で教鞭をおとりにりました。学術的な貢献がなされたのは、おもにこの時期の前半部で、奥多摩などの洞窟調査も、1951 (昭和 26) 年の 6 月から 10 月にかけて、繰り返し行われました。印刷事情の悪かった当時、公表された論文はあまり多くありませんが、比較的、重要な報文として、下記の 6 篇が挙げられるでしょう。

- 1936. Descriptions of Japanese beetle larvae (1) (Carabidae Col.). *Trans. Kansai ent. Soc.*, (7): 7-10, pl. 1.
- 1939. 蟻と共棲してゐる本邦産蟻塚蟲に就て. 關西昆蟲學會々報, (8): 92-93. [中野定一と共著.]
- 1952. A list of the Arthropoda in the limestone caves in Kantô-Mountainland, with the descriptions of a new genus and three species. *Chûhō, Tokyo*, (6): 1-8, with 1 folder and 1 pl. [Coauthored with Sizumu NOMURA.]
- 1960. Description of a new carabid-beetle from a limestone cave of Japan. *Jpn. J. Zool.*, 12: 493-496. [Coauthored with Sizumu NOMURA.]
- 1960. Description of a new species of the genus *Pterostichus* from Japan (Carabidae, Coleoptera). *Kontyû, Tokyo*, 28: 184-186. [Coauthored with Kazuo TANAKA.]
- 1966. A presumptive prototype of the *Trechoblemus* complex (Coleoptera, Trechinae). *Bull. natn. Sci. Mus., Tokyo*, 9: 75-83. [Coauthored with Shun-Ichi UENO.]

これらのうち、1952 年の論文には、*Kurasawatrechus eriophorus* クラサワメクラチビゴミムシ (日本有数の大きい属の基準種)、*Coryphium japonicum* ハラビロヨツメハネカクシ、*Machaerites japonicus* ホラアナアリツカムシ (現在の学名は *Bythoxenites japonicus*) の 3 種が、1960 年の野村鎮と共著のものには *Trechiamamaensis* ヨウザワメクラチビゴミムシ、田中和夫と共著のものには *Pterostichus (Nialoë) tokejii* トケジナガゴミムシが、また 1966 年の論文には *Oroblemus caecus* イワキメクラチビゴミムシが、新種または新属新種として記載されています。なお、これらのほかに、オカダケムネチビゴミムシとイズイツチビゴミムシの記載も準備しておられたことを、のちになってから伺いましたが、当時の乏しい知識では属の類縁関係を判定するのがむずかしくて、公表にいたらなかったのだということでした。

横浜緑ヶ丘高等学校をおやめになったあとは、学会や同好会の集まりに出られることが減になく、したがって若い研究者が吉田さんの聲咳に接する機会もほとんどなかったのですが、お宅で甲虫の全形図や記載の下書きは続けていらっしたようです。そのような作品の整理がつけば、わたしたちの知らない新発見がいろいろと含まれているかもしれません。

最初にも書きましたように、吉田 晶さんは、戦後の日本におけるゴミムシ類やハネカクシ類の分類学的研究の先覚者であったばかりでなく、日本の洞窟昆虫学の先覚者の一人でもありました。世の中がまだ安定していなかったその時期に、盲目のチビゴミムシ類の 2 新属 3 新種をご自分で発見されて学界に報告されたご功績は、日本の甲虫学史に永く記憶されるべきものです。しかし今では、吉田さんを直接に存じ上げている人がひょっとして少なくなりました。それで、将来のために記録を留めておくという意味合いも兼ねて、この追悼文は少し詳しく書きました。その執筆のために、たくさんの断片的な資料を探し出してくださったご令息の吉田哲郎様と英二様に、末筆ながら厚くお礼を申し上げます。

* 安立綱光, 1955. 日本産アリガタハネカクシ亜科の分類学的研究 (日本産ハネカクシ科の研究第 11 報). 東洋大学紀要第 7 輯, pp. 11-36 (裏より). [ADACHI, T., 1955. Systematic study on the subfamily Paederinae of Staphylinidae of Japan (Eleventh contribution to the knowledge of Staphylinidae of Japan). *J. Toyo Univ., Tokyo*, (7): 11-36 (from the back). (In Japanese, with English descriptions.)]

○マレーズトラップで捕獲されたケバコフキコガネ

ケバコフキコガネ *Tricholontha papagena* NOMURA (写真) は沖縄島と徳之島のみ分布し、冬季に出現することが知られている(湊, 1996)。しかし、その生態については森林の発達した場所で、灯火によく飛来してくることが知られるくらいで、ほとんど分かっていない。筆者らは沖縄島名護岳周辺の各種林分にマレーズトラップを設置して、本種を捕獲した。灯火採集では、その生息林分から離れた場所からも飛来してくることが考えられ、その生息林分を特定することは困難である。しかし、



写真 ケバコフキコガネ雄成虫 体長 27 mm.

| 調査期間 | 捕獲個体数 | | |
|---------------------|-------|-----------------|-----------|
| | 広葉樹林 | リュウキュウマツ・広葉樹混交林 | リュウキュウマツ林 |
| 2002. 11. 16~12. 02 | 0 | 0 | 0 |
| 2002. 12. 02~30 | 0 | 2 | 1 |
| 2002. 12. 30~ | | | |
| 2003. 01. 13~ | 0 | 3 | 1 |
| 2003. 01. 13~02. 10 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | 0 | 5 | 2 |

マレーズトラップではトラップ周辺を飛来している個体が捕獲されるため、その生息林分を特定しやすと思われる。採集データを下記の表に示す。捕獲されたのは全部雄である。

上記の表から分かるように捕獲された期間は12月から1月にかけてで、発生期間は非常に短いようである。また、広葉樹林では全く捕獲されずにリュウキュウマツのある林分で捕獲されていることから、生息地として、リュウキュウマツ林が考えられる。しかし、捕獲個体数が少ないため、断定はできないが、今後の調査の参考になればと思い、ここに報告した。なお、本報告は林業普及情報活動システム化事業「昆虫を指標とした里山広葉樹林の評価手法及び管理手法に関する調査」の成果の一部である。

引用文献

湊 和雄, 1996. ケバコフキコガネ. 沖縄県昆虫野外観察図鑑, 6: 38-39.

(沖縄県林業試験場, 伊禮英毅)
(独立行政法人 森林総合研究所, 横原 寛)

○小笠原諸島北硫黄島におけるオガサワラヒラアシコメツキの記録

神奈川県立生命の星・地球博物館は、1997年より小笠原諸島の昆虫類の調査を許可を得て進めてきたが、今年その成果を報告書としてまとめた。この中で、鞘翅目コメツキムシ科は7種が確認され、これまでコメツキムシの記録がまったくなかった北硫黄島からオガサワラホソクシコメツキ *Priopus boninsis* (VAN ZWALUWENBURG, 1957) が記録された。筆者は、同調査に参加した松本慶一氏より、北硫黄島で採集されたオガサワラヒラアシコメツキ *Propsephus langfordi* VAN ZWALUWENBURG, 1957 の標本を預かっていたが、筆者のミスで目録に盛り込むことができなかったので、ここに記録しておきたい。

4 exs., 東京都小笠原北硫黄島石ノ森, 21. VI. 2003, 松本慶一採集(ライトトラップ); 1 ex., 同地, 21-22. VI. 2003, 松本慶一採集(マレーズトラップ)。

標本はすべて、神奈川県立生命の星・地球博物館に保管される。

末筆ながら、標本を検査する機会を与えてくださった松本慶一氏に厚くお礼申し上げる。

引用文献

菊部治紀・高桑正敏・須田真一・松本浩一・岸本年郎・中原直子・長瀬博彦・鈴木 互, 2004. 神奈川県立生命の星・地球博物館が行った1997-2003年の調査で得られた小笠原の昆虫目録. 神奈川博調査研報(自然), (12): 73-74.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

ホソアカコメツキの雄の形態について

大平 仁 夫

Notes on the male structure of *Ampedus (Ampedus) chlamydatus* from
Aichi Prefecture, Honshu, Japan. (Coleoptera: Elateridae)

Hitoo ÔHIRA

ホソアカコメツキ *Ampedus (Ampedus) chlamydatus* (LEWIS, 1894) は, G. LEWIS (1894) が 'Kazusa, an island off Yokohama' から採集して記載した唯 1 頭の体長 9.5 mm の上翅が赤褐色をした小形の種である。本種の holotype 標本は, 大平 (1973) や大平・稲泉 (1998) が図示しており, 一般外形についてはほぼ判明している。タイプ標本の詳しい産地名はまだよく判明していないが, 横浜近辺の地域 (島である確証はない) で, 房総半島ではないかとも云われている。

原記載以降, 本種は青森県, 栃木県, 山梨県, 和歌山県などから記録されており, 大平 (2003) は愛知県から報告している。しかし, 筆者がここに示した愛知県産を除いて, 他の県からの記録がすべて本種であるという確証はなく, KISHII (1996) が示した山梨県身延町産の雄交尾器の図は, 筆者がここに示した種のそれとは相違しており, これとは別種である可能性が高い。

本種は低山の里山雑木林に分布し, 成虫は 4 月から 5 月頃にかけて現れるが, 比較的稀な種のようなのである。なお, 里山の低山帯の雑木林には, 本種に類似した未記載種も含めて複数の種が分布しているので, 今後はこれらの種の実態も明らかにして, より詳しい形態の比較をしたいと考えている。

形態の概要

雄 (Fig. 1). 体長は 9 mm 内外で細長い。体は黒色で光沢を有し, 頭部, 前胸背板, 小盾板などは黒色で, 上翅は濃赤褐色である。前胸背板はオパール色の光彩を有しない。小顎枝の末端節, 触角の基部節, 肢の腿節と脛節などは黒褐色であるが, 他の節は暗褐色である。体毛は黒色で, 頭部と前胸背板にはやや長い毛を生じる。

頭部の前頭部は緩く膨隆し, 点刻はやや粗雑に印する (Fig. 1D)。前頭横隆線の前縁中央部は多少とも抑圧され, 下方に湾曲する (Fig. 1D')。前胸背板は幅より長く, 両側は漸次後方に幅広くなる (Fig. 1B)。また, 後角末端部はやや内方に湾曲してとがる (Fig. 1C)。前胸背板上の点刻は円形の深い小点刻を一様に規則的に印する。触角の末端は, 前胸背板の後角よりやや長い (Fig. 1A)。第 2 節は短小で幅よりやや長く, 第 3 節は倒円錐状で, 第 4 節から顕著に鋸歯状を呈し, 第 4 節は第 3 節の約 2 倍の長さである (Fig. 1E)。前胸腹板突起は, 前肢基節腔を越えてから緩く内方に湾曲して伸長し, 末端近くで水平状になり, 鋭角状の段刻を生じる (Fig. 1I')。上翅の条線は明瞭に印し, 間室部は弱く隆起し, 不規則なしわ状である。

交尾器の背面からの外形は図示したようで, 中央突起は幅狭く, 両側は末端に漸次細まる (末端は下方に湾曲してとがるため, 図では真の末端は示されていない) (Fig. 1F)。また, 中央突起の末端部の表面には, 目立つ円形状の点刻 (感覚器?) を不規則に生じる (Fig. 1H)。側突起の末端部の三角状部は幅より明らかに長く, 外縁は内方に湾曲し, 外縁角は細まって後外方に鋭くとがり, そこには数個の明瞭な段刻を生じる (Fig. 1G')。

雌。一般外形は雄に類似する。体長は 10 mm 内外で, 触角はより短く, 末端は前胸背板の後角に達する程度である。

調査標本: 1♂, 愛知県音羽町 (林道筑田牛沢線), 13-V-2001, 大平採集 (Fig. 1B~I に分解して示した個体); 1♂, 同上 (林道牛沢下谷下線), 21-V-2001, 大平採集 (Fig. 1A に示した個体); 1♀, 愛知県岡崎市池金町, 19-IV-2002, 大平採集。

引用文献

- LEWIS, G., 1984. On the Elateridae of Japan. *Ann. Mag. nat. Hist.*, 6(13): 26-48.
 KISHII, T. 1996. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area (14). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (39): pl. 7, fig. 56.
 岸井 尚, 2003. マレーゼトラップによる大澤正嗣氏蒐集の秩父山塊産コメツキムシ。ねじればね, (105): 1-15.
 大平仁夫, 1973. 日本産コメツキムシ科の知見 (XIV). *Kontyû, Tokyo*, 41: 102-105.
 大平仁夫, 2003. ホソアカコメツキ愛知県に分布。月刊むし, (392): 45-46.
 大平仁夫・稲泉三丸, 1998. 栃木県から分布上興味あるコメツキムシ類の記録 (10), *インセクト*, 49(2): 57-59.

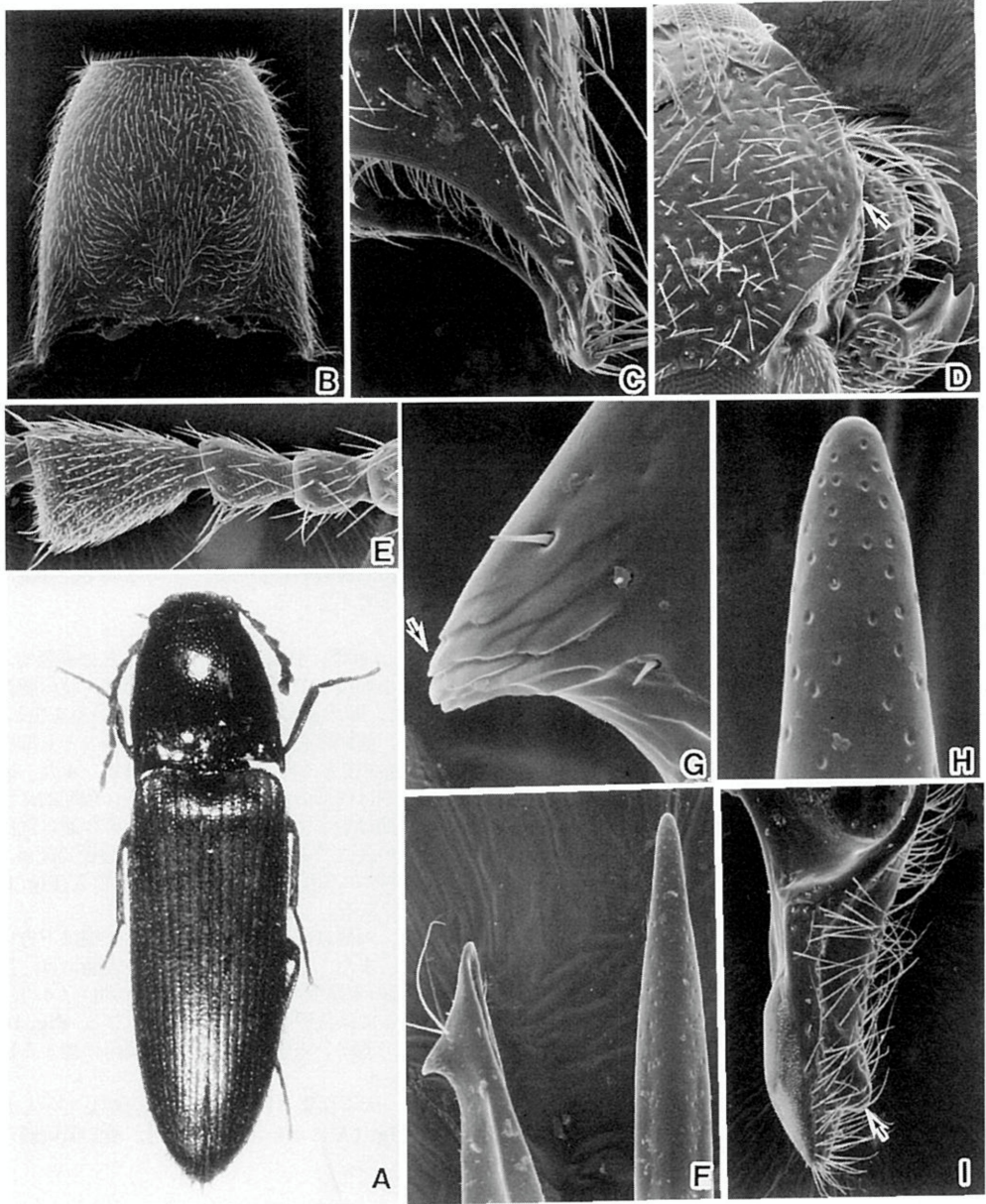


Fig. 1. A-I, *Ampedus (Ampedus) chlamydataus*, male, Aichi Prefecture.—A, Adult, body length 9mm; B, pronotum, dorsal aspect; C, right hind corner of pronotum; D, head, dorso-lateral aspect; E, 2nd to 4th segments of right antenna; F, apical portion of male genitalia, dorsal aspect; G, outer angle of right lateral lobe of male genitalia, dorsal aspect; H, same, median lobe; I, prosternal process, lateral aspect.

(岡崎市舞木町)

ミヤマヒラタハネカクシ種群 (甲虫目ハネカクシ科) に含まれる 2 種の採集記録

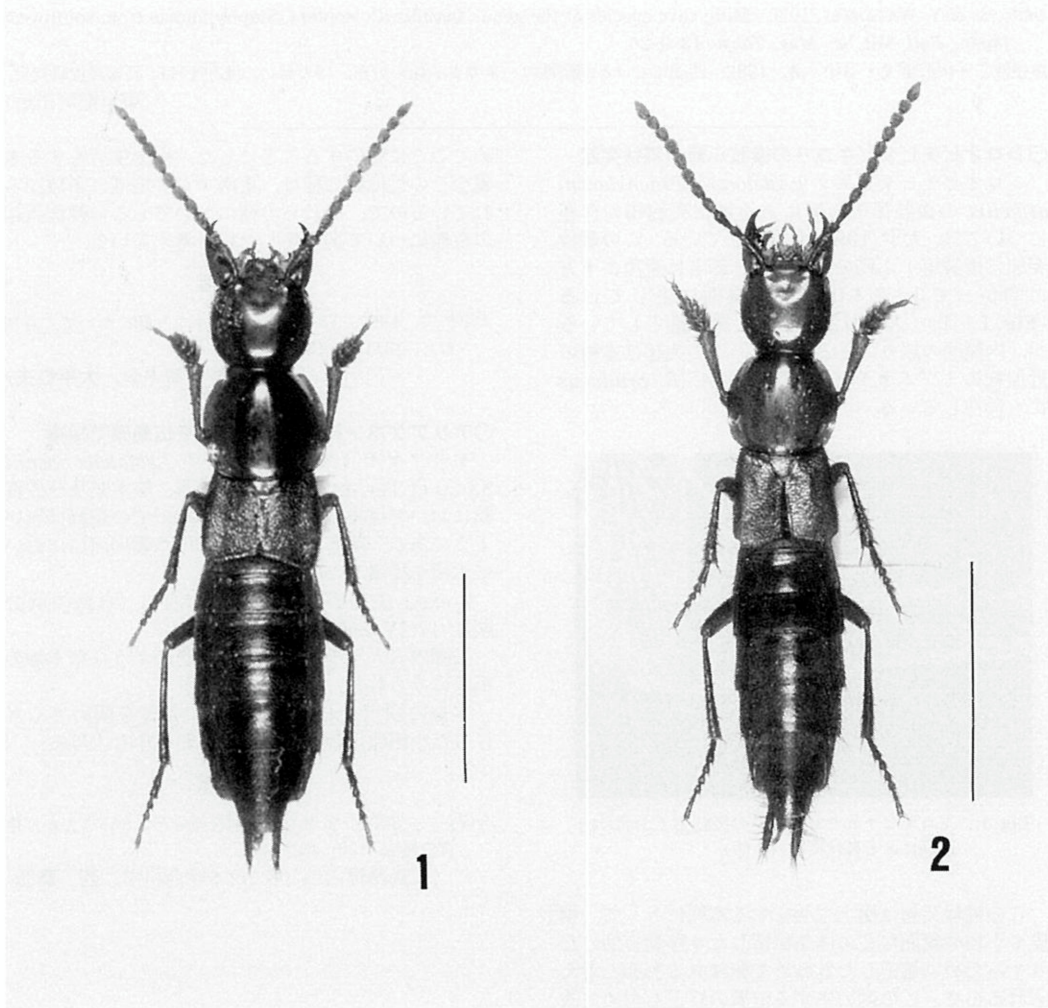
渡 辺 泰 明

ミヤマヒラタハネカクシ種群に含まれる種は、これまで大部分の種が洞窟、鉱山の廃坑および地下浅層などの閉塞された環境から発見されている。このため、これらの種は体色が赤褐色を呈し、複眼は著しく縮小し、後翅が退化したきわめて特徴的な形態を示している。昨年、私は西宮市在住の森 正人氏より、同氏が地下浅層から採集された一連のハネカクシ類をご恵与頂いたが、それらの中にこの種群に含まれる 2 種を見出した。これら 2 種のハネカクシは、これまで洞窟内からのみ知られ、今日まで洞窟外からの採集個体は報告されていないので下記の通り記録しておきたい。

報告に先立ち、貴重な標本をご恵与下され、それらの生息環境についてご教示頂いた森 正人氏、ならびに標本撮影の労を煩わせた鶴 智之および小野広樹の両東京農業大学昆虫資源学研究室員に心から御礼申し上げます。

1. *Quedius (Microsaurus) kawasawai* S. UENO et Y. WATANABE トサヤマツヤムネハネカクシ (Fig. 1, Scale: 5.0 mm.)

5♂♂, 6♀♀, 徳島県名西郡神山町雲早山, 21. VII. 2002, 森 正人採集; 1♂, 同上, 5. X. 2002, 森 正人採集.



この種は, UÉNO & WATANABE (1970) によって高知県土佐郡土佐山村の菖蒲洞鍾乳洞から採集された 1♂, 1♀ の 2 個体に基づいて記載・発表された. その後, 川沢・魚住・平化 (1982) および魚住・川沢・平化 (1982) によって, 同県土佐郡の御山所権現の穴, 峰石原の穴および白岩銅の三つの洞窟が本種の産地として追加された. この様に, 本種の産地は現在まで高知県内からのみ知られ, 同県以外からは知られていなかった.

森氏によれば, 採集された個体の内 4♂♂, 4♀♀ は標高 1,200 m, 2♂♂, 2♀♀ は標高 1,300 m 地点の, いずれも深さ 50 cm ほどの地下浅層から掘り出されたとのことである.

2. *Quedius (Microsaurus) higonis* S. UÉNO et Y. WATANABE ヒゴツヤムネハネカクシ (Fig. 2, Scale: 5.0 mm.)

2♂♂, 熊本県八代郡泉村白鳥山, 5. IX. 2002, 森 正人採集.

この種も上記の種と同様, UÉNO & WATANABE (1979) によって, 熊本県上益城郡御船町の風神洞および同県球磨郡五木村の九折瀬洞の両鍾乳洞から採集された 2 頭の♂ 個体に基づいて記載・発表された. しかし, その後今日まで追加の採集報告はなされていないようで, 今回の報告が原記載以後初めての記録と思われる. 今回採集された個体は, 熊本県と宮崎県椎葉村との県境尾根近くの, 標高 1,638 m ほどの白鳥山と呼ばれる山の西側の谷で, 標高 1,300 m 地点の深さ 80 cm ほどの地下浅層から採集されたという.

引用文献

川沢哲夫・魚住政二・平化 満, 1982. 四国の洞窟と洞窟動物 II. 鏡川流域石灰洞の洞窟動物とその分布の特徴. げんせい, (41): 1-7. 高知昆虫研究会.

UÉNO, S., & Y. WATANABE, 1970. More cave species of the genus *Quedius* (Coleoptera, Staphylinidae) from southwest Japan. *Bull. Nat. Sci. Mus., Tokyo*, 13: 9-20.

魚住政二・川沢哲夫・平化 満, 1982. 四国における洞窟性のハネカクシ類の分布. げんせい, (42): 1-11. 高知昆虫研究会. (東京都町田市)

○シロオビチビサビキコリの後肢ふ節の棘状突起

シロオビチビサビキコリ *Adelocera (Brachylacon) difficilis* の後肢第 1 ふ節にある棘状突起物の存在については, 大平 (1997) が図示している. この棘状突起は後肢第 1 ふ節の内側面に, 節とは直角に下方に向かって 3~7 本内外が不規則に生じている (Fig. 1 ↑ 印). 大平 (1993) では, 外側面としているが, 内側面の誤りである. また, この突起は本種の近似種のミヅメチビサビキコリ *A. (B.) brunneus* にも存在している.

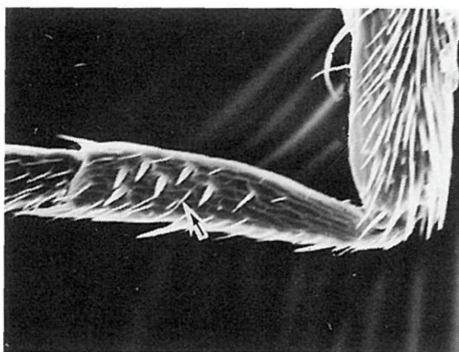


Fig. 1. シロオビチビサビキコリの後肢第 1 ふ節の内側面にある棘状突起 (↑ 印).

この棘状突起は樹上生活をする本種にとって, 樹皮や小枝や葉面などに体を保持したり移動を助けたりするために適応したきわめて興味ある形態と考えられるので, この棘の生ずる位置の訂正も含めて改

めてここに報告することにした. 樹上生活をする本属やその近似属の種は, 東南アジア地域に多数知られているので, それらの種についてもこの棘状突起の有無について調査をしたいと考えている.

引用文献

大平仁夫, 1997. 日本産チビサビキコリ類について. 月刊むし, (311): 9-13.

(岡崎市舞木町, 大平仁夫)

○アリアケホソヒメアリモドキを広島県で採集

アリアケホソヒメアリモドキ *Leptaleus sasajii* SAKAI et TELNOV, 2001 は長崎県, 熊本県及び佐賀県において採集記録があるが, 本州での記録は無いようである. 筆者は広島市五日市八幡川河口において本種を採集したので報告する.

9 exs., 広島市五日市八幡川河口 (水鳥の浜公園), 17. IV. 2003.

公園内の人工干潟に生育する芝のような草本類の根際にみられた.

本種の同定をしていただき, 発表を薦めてくださった小田原市の平野幸彦氏にお礼申し上げます.

参考文献

今坂正一, 2002. 多良山系の固有種はどこからきたか. 佐賀の昆虫, (36): 481-526.

(広島県福山市 (株) 日本総合科学, 西 真弘)

男女群島の甲虫相について

足立 一 夫

男女群島で採集した昆虫類 264 種について「新筑紫の昆虫第 7 号」に記録を掲載したが、その中から鞘翅目について新たに記録された種等を加え解説をおこないたい。

男女群島からは過去に 32 科 173 種の甲虫類が記録されており、このうち固有種が 20 種、固有亜種が 12 種と多く、男女群島から確認された甲虫類の 18.5% に及んでいる。これは近隣の対馬や屋久島が 5% 前後であることに對して非常に高い比率である。

男女群島は長崎県福江市に所属し、五島列島の福江島から南南西へ約 70 km の位置にある、女島の最高峰が標高 281 m、男島では標高 225 m である。

男女群島に生育する植物は亜熱帯系のアコウやサツマサンキライ、クワズイモ等 176 種が知られている。甲虫類の多く生息する森林を形成する主な樹木はモクダチバナとタブノキに代表され、海岸から中腹までがモクダチバナの大群落で、この中にマサキ、イヌビワ、タブノキ、ヤブニッケイ、リュウキュウエノキ、ヤマグワ、アコウ、ハマビワ等を含んでいる。中腹から山頂にかけてはタブノキの森林で、植物学的にはタブノキームサシアブミ群集である。海岸から標高 50 m 位までは、マルバニッケイの群落が島の北部～西部にかけて帯状に分布している。

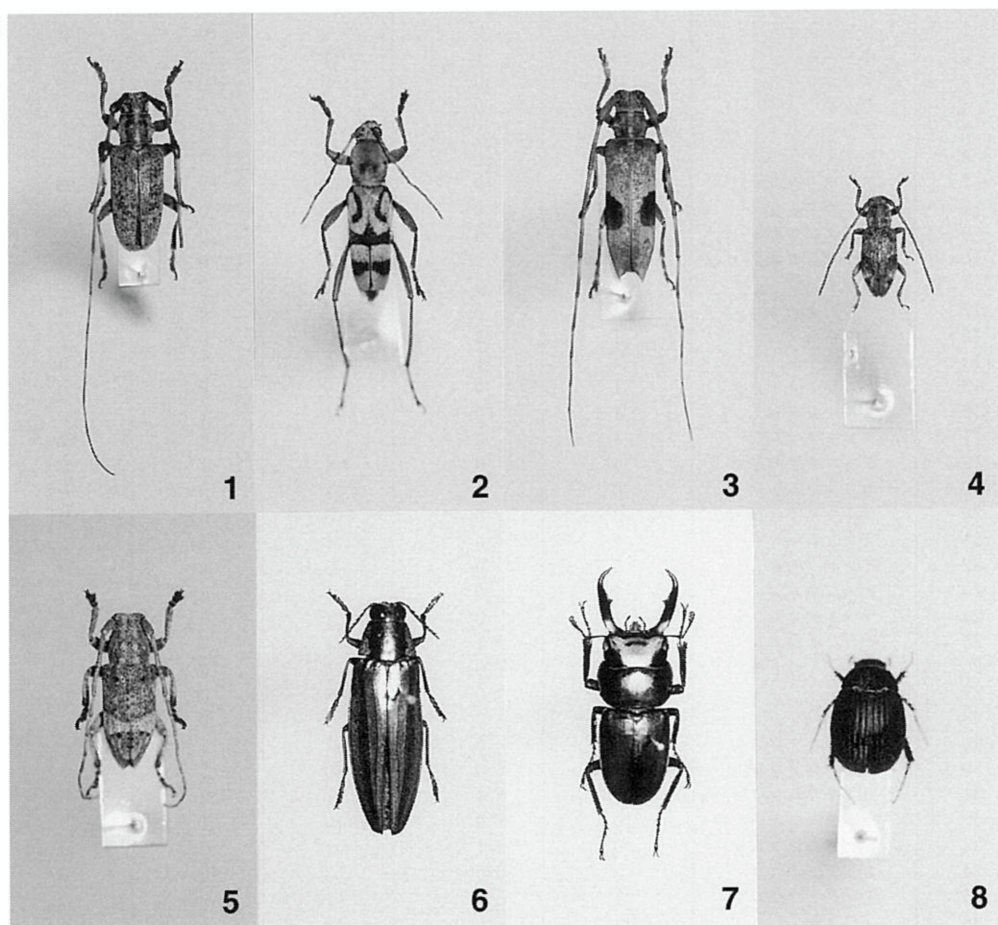


写真 1. メシマコブヒゲカミキリ 2. メシマキイロトラカミキリ 3. ダンジョヤハズカミキリ
 4. メシマハネナシサビカミキリ 5. メシマトガリシロオビサビカミキリ 6. ダンジョルリタマムシ
 7. ミシマコクワガタ 8. ダンジョピロウドコガネ

男女群島の森林の特徴として、記録にはクロマツ (植栽)、スダジイが見られるが、現在ではクロマツ、スダジイは皆無であり、クロマツはすでに枯死してしまったと思われる、スダジイについては稀なものと思われる。通常島嶼では宍岐、対馬、五島等でシイやタブノキの林が普通に見られるものだが、この男女群島に関してはシイ・カシ等のブナ科植物はもとより、マツ等の針葉樹が全く見られない。このような植物相の特殊性が甲虫をはじめ、森林に依存する他の昆虫類全般の種数の貧弱さと関連があるのかもしれない。特にブナ科と針葉樹の欠落は昆虫相に与える影響はかなり大きいものと思える。したがって九州本土に普通に生息するシロスジ、ミヤマ、ゴマダラ、ウスバ、ヨツスジハナ、ツシムムナクボ、マツノマダラ、エグリトラ、ナガゴマフ、ヒメヒゲナガ等のカミキリ類が記録されていないのも納得がいく。

ついでではあるが男女群島の動物についても少し触れておきたい。鳥類は移動性が大きいのでこれは別にして、哺乳類はアカネズミとクマネズミの 2 種が生息している。クマネズミは漁船と共に侵入したものと思われる。爬虫類はニシヤモリ、ダンジョヒバカリ、シロマダラ、トカゲの 4 種が生息しており、ニシヤモリとトカゲの個体数は多い。水系が貧弱な為か両生類は分布していない。しかし小さな溪流には褐色のサワガニが生息しており、これを餌とするオオウナギが極く少数ながら生息している。オオウナギが生息しているのは男島の

表 1. 男女群島に生息する鞘翅目昆虫類の現状

2003 年現在

| No. | 科名 | 既知種数 | 追加種数 | 合計 | 固有種 | 固有亜種 |
|-----|----------|-------|------|-------|------|------|
| 1 | ハンミョウ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 2 | オサムシ | 23 | 1 | 24 | (1)* | 1 |
| 3 | ゲンゴロウ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 4 | ガムシ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 5 | エンマムシ | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 6 | ハネカクシ | 5 | 0 | 5 | 0 | 0 |
| 7 | アリヅカムシ | 3 | 0 | 3 | 3 | 0 |
| 8 | クワガタムシ | 2 | 0 | 2 | 0 | 1 |
| 9 | コブスジコガネ | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 10 | アツバコガネ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 11 | コガネムシ | 11 | 0 | 11 | 2 | 1 |
| 12 | ナガハナノミ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 13 | タマムシ | 1 | 2 | 3 | 0 | 1 |
| 14 | コメツキムシ | 4 | 1 | 5 | 1 | 0 |
| 15 | ナガシクイムシ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 16 | ダルマガムシ | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| 17 | タマキノコムシ | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| 18 | ジョウカイモドキ | 4 | 0 | 4 | 1 | 2 |
| 19 | カッコウムシ | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 20 | ケシキスイ | 3 | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 21 | ミジンムシ | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| 22 | テントウムシ | 5 | 0 | 5 | 0 | 0 |
| 23 | ヒメマキムシ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 24 | ツツキノコムシ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 25 | ナガクチキムシ | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 26 | カミキリモドキ | 5 | 0 | 5 | 0 | 0 |
| 27 | ハナノミ | 5 | 0 | 5 | 0 | 0 |
| 28 | クチキムシ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 29 | ハナノミダマシ | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| 30 | ゴミムシダマシ | 10 | 0 | 10 | 1 | 0 |
| 31 | カミキリムシ | 20 | 1 | 21 | 3 | 6 |
| 32 | ハムシ | 10 | 0 | 10 | 1 | 0 |
| 33 | ヒゲナガゾウムシ | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 34 | オトシブミ | 3 | 0 | 3 | 0 | 0 |
| 35 | ホソクチゾウムシ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 36 | ゾウムシ | 43 | 0 | 43 | 4 | 0 |
| 計 | 36 科 | 173 種 | 9 種 | 182 種 | 21 種 | 12 種 |

* モリヒラタゴミムシ属の一種で現在研究中のもの

みで、女島には生息していない。このことから、男島の方が水量もあり、動植物が豊富であろうことは推察出来る。

前置きが長くなったが、今までに記録された甲虫類 32 科 173 種に今回 2001 年までの記録として 4 科 9 種を追加し、合計で 36 科 182 種が記録された。(表 1 参照) 今回追加となった科はエンマムシ科、カッコウムシ科、ナガクチキムシ科、ヒゲナガゾウムシ科の 4 科で種としてはモリヒラタゴミムシ属 sp., チビヒラタエンマムシ属 sp., アヤムネスジタマムシ, ヒラタチビタマムシ属 sp., オオサビコメツキ, ダンダラカッコウムシ, ホソナガクチキムシ属 sp., トゲヒゲトビロカミキリ, キスジヒゲナガゾウムシの 9 種である。正直なところ、浅学な筆者にはいったいどの科に属する甲虫なのか判らない種や、ハネカクシ, ハムシ, ゾウムシの仲間であつた手も足も出ない種が相当数ある。少しずつ専門の方に見て戴こうと思っている次第である。

甲虫類の中で最も多く記録されているのはゾウムシ科の 43 種で、次いでオサムシ科の 24 種, カミキリムシ科の 21 種, コガネムシ科の 11 種, ゴミムシダマシ科及びハムシ科の 10 種である。科別の種数を見る限りではゾウムシ科が群を抜いているが、男女群島で採集した経験からすればゾウムシ科だけがそれほど多いようには見えないことから、他の科はこれからもっと増えるものと期待される。特に男島や女島の北側の森林は急傾斜であることからアクセスが困難であり、殆ど人の入っていない場所であることから、探検を兼ねて春～夏のベストシーズンに許可を得て採集を行えば、未知の甲虫類がまだまだ眠っているものと思われる。過去の甲虫類の記録や今回の記録から男女群島に生息する甲虫類の特徴として次の点が考えられる。

①トカラ・屋久島方面より陸路或いは海流により分布を広げた種を多く含む。

②男女群島において固有種又は固有亜種に分化した種が多い。

③大陸と日本が陸続きであつた事を示す種が分布する。

以上の点から今後男女群島に生息が予測される甲虫類としては、クワガタムシ科ではネプトクワガタ, ヒラタクワガタ等, カミキリムシ科ではアメイロ, ニッポンモモボト, クスベニ, ムモンチャイロホソバネ, ニイジマトラ, キュウシュウチビトラ, ケナガ, ドイ等, タマムシ科ではヒシモンナガタマ, ムネアカナガタマ等である。このほか、ハムシ科, ハネカクシ科, アリズカムシ科, ケシキスイ科, オオキノコムシ科, コメツキムシ科は確実に追加種が期待できるグループである。

参考文献

- 足立一夫, 2003. 男女群島で採集した昆虫類 (その 1). 新筑紫の昆虫, (7): 41-74.
 江島正郎・野田正美, 1973. 男女群島の甲虫類. 男女群島の生物: 121-123.
 林 匡夫・森本 桂・木元新作, 1984. 原色日本甲虫図鑑 (IV). 438 pp. 保育社.
 池崎善博・江島正郎, 1990. 長崎県男女群島陸生動物相調査 (1989 年 5 月) 報告. こがねむし, (51): 20-29.
 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III). 500 pp. 保育社.
 日本鞘翅目学会編, 1985. 日本産カミキリ大図鑑. 565 pp. 講談社.
 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 514 pp. 保育社.

(福岡県福岡市)

○西丹沢におけるオオアオカミキリ

神奈川県におけるオオアオカミキリの記録は、京浜昆虫同好会編「新しい昆虫採集案内」第 1 巻 (1971) における採集地案内「西丹沢」の項にその種名が登場するにすぎないと思われる。「西丹沢」の案内の原案は猪又敏男氏が執筆したもので、それに甲虫分野は筆者らの 1 人高桑, ガ類は中臣謙太郎氏を書き足した。高桑の記憶では、猪又氏からの確実な情報を基にして本種を「箒沢で採集できる」としたものである。しかし、本種についてはその後西丹沢から正式に発表されることもなく、また標本の所在も不明のまま現在に至ってきた。

ところが、筆者らの 1 人、小林は自分が所有していた古い標本類をたまたま整理していたところ、西丹沢産の本種 1 頭存在に気がついた。採集場所と採集年からも、この標本が上記「西丹沢」の記述の基となったものの可能性がきわめて強い。次にデータを示すことで、記録の正式な発表としたい。

1♀, 丹沢ホウキ沢 (山北町箒沢), 26. VII. 1968,

神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵。

ラベルには採集者名が記されていないので確実ではないが、もし上記の推測のとおり標本だとすると、猪又氏採集によることは確実である。お聞きしたところでは、1968 年に箒沢にあったサワグルミらしい材の切り口にいた個体を採集した記憶があるとのお話だからであり、また採集日も猪又氏自身が箒沢を訪れたことが他のカミキリのデータからも裏付けられるからである。猪又氏と小林とは旧知の間柄であるので、何かの機会に本標本の譲り渡しがあったのであろう。なお、当時の箒沢は交通も不便な奥まった環境にあり、周辺から切り出された材木の集積場となっていた。

最後に、本件のことでいろいろとお伺いしたむし社の猪又敏男氏に感謝申し上げます。

(横浜市戸塚区, 小林敏男)

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

○冬季にマレーズトラップで捕獲されたニセコゲチャサビカミキリ

ニセコゲチャサビカミキリ *Mimectatina iriei* HAYASHI は奄美大島と沖縄島に分布し、主に 4 月から 6 月に採集され、比較的珍しいとされている種である。今回、筆者等は沖縄島名護岳に設置したマレーズトラップで 5 個体捕獲し、そのうちの 1 個体は 1 月下旬から 2 月上旬の冬季に捕獲された。珍しい記録と思い、ここに報告する。データは下記の通りである。なお、採集者は全て、筆者の一人、伊禮である。

名護岳 (リュウキュウマツ林): 1♂, 13-27. V. 2002; 1♂, 7-21. X. 2002; 1♀, 27.1-10. II. 2003; 1♀, 14-28. IV. 2003.

名護岳 (広葉樹林): 1♂, 24. VI-8. VII. 2002.

上記のように 5, 10, 1-2, 4, 6-7 月にマレーズトラップで捕獲されている。マレーズトラップで捕獲されていることは、このカミキリムシが飛翔したと考えられる。他のカミキリムシの例から、一般にカミキリムシの飛翔には 20°C 以上の条件が必要である (横原, 2002)。1 月 27 日から 2 月 10 日までの名護市の気象条件を見ると、最高気温が 20°C 以上の日は 1 月 27 日の 21.0°C, 2 月 1 日 21.5°C, 8 日 21.9°C, 9 日 22.8°C, 10 日 23.4°C であった。そして、これらの日のうち、雨が降らなかったのは 2 月 8-10 日で、しかも、最低気温もほぼ 20°C であった。夜行性と考えられるニセコゲチャサビカミキリにとってはこの 3 日間は飛翔可能で、捕獲されたのはこのうちのどれかだと思われる。名護岳での調査は 2002 年 4 月から 2003 年 7 月まで連続しておこなっており、このカミキリムシは盛夏のころには捕獲されていない。これらのことから、本種は秋に成虫が出現し、越冬をして、初夏まで活動をするものと推定される。

なお、本報告は林業普及情報活動システム化事業「昆虫を指標とした里山広葉樹林の評価手法及び管理手法に関する調査」の成果の一部である。

参考文献

横原 寛, 2002. スギノアカネトラカミキリ —これまで明らかになったことと今後の問題点—。森林をまもる—森林防疫研究 50 年の成果と今後の展望—, 171-181, 全国病虫獣害防除協会。

(沖縄県林業試験場, 伊禮英毅)
(独立行政法人 森林総合研究所, 横原 寛)

○石川県未記録のチビジョウカイ亜科 2 種

チビジョウカイ亜科に属する甲虫類は、ジョウカイボン科の中でも小形のものが多く、目に留まる機会の比較的少ないグループのようである (高橋, 2003)。

高田 (1998) によれば、石川県で記録されているチビジョウカイ亜科は、ナガチビジョウカイ *Malthodes longipygus* WITTMER およびムネミゾクロチ

ビジョウカイ *M. sulcicollis* KIESENWETTER の 2 種のみであり、本県におけるチビジョウカイ相はほとんど解明されていないのが現状である。

筆者の一人である高田は、石川県の金沢市角間 (金沢大学角間キャンパス周辺) の丘陵地において、1997 年と 1998 年にスウィーピング法による定量的ラインセンサス調査を実施した [採集法の詳細は高田 (2002) を参照されたい]。その結果、石川県未記録である、チビジョウカイ亜科に属する 5 種が採集された。このうち、クロツマキジョウカイ *Malthinus japonicus* OHBAYASHI については高田 (1998) により報告されているが、残る 4 種の記録については未発表である。4 種のうち、2 種については現在分類学的・生態学的に検討中であるため、残る 2 種の記録をここに報告しておく。

なお、採集記録のうち、採集地はすべて石川県金沢市角間、採集者は高田、同定は高橋によるものである。また、標本は現在、筆者らが分担して保管中である。

1. フタイロチビジョウカイ *Malthinellus bicolor* KIESENWETTER

1 頭, 28. V. 1997; 2 頭, 7. VII. 1998.

2. キタチビジョウカイ *Malthodes kurosawai* WITTMER

1 頭, 2. V. 1997.

末筆ながら、本報告を執筆するにあたり、貴重な助言を賜った高羽正治氏 (金沢市) に御礼申し上げます。

引用文献

高田兼太, 1998. ジョウカイボン科。石川むしの会・百万石蝶談会編, 石川県の昆虫: 166-167, 石川県。

高田兼太・中村浩二, 2002. スウィーピング法による金沢市角間丘陵の甲虫相調査。1. ヒメマキムシ科 Corticariidae (Lathridiidae)。石川県白山自然保護センター研究報告, 第 29 集: 17-23。

高橋直樹, 2003. チビジョウカイ亜科甲虫類数種の分布記録。甲虫ニュース, (141): 15-16。

(金沢大学, 高田兼太)
(九州大学, 高橋直樹)

○訂正「沖縄島未記録の甲虫 2 種」

伊禮・横原 (2004, 甲虫ニュース, (145): 6) は、イシガキトサカシバンムシを沖縄本島初記録として発表したが、秋田勝巳 (1999, 月刊むし, (342): 43) および平野幸彦 (2001, 月刊むし, (359): 45) によりすでに同島から報告されていることが明らかになったので、ここに訂正する。

(沖縄県林業試験所, 伊禮英毅)
(独立法人 森林総合研究所, 横原 寛)

○与那国島で採集したゴミムシ類 8 種の記録

筆者は与那国島に 1999 年, 2000 年, 各 8 日ずつ滞在し, 昼間の採集はそこそこにして毎晩発電機を使ってのナイターをした。以下, 採集記録の少ないと思われるもの, 新分布と思われるゴミムシ類 8 種の報告をする。採集者はすべて筆者である。

1. ミナミツヤナガゴミムシ *Abacetus submetallicus* (NIETNER) (Fig. 1)

1 ex., 空港～祖納, 7-14. VII. 1999; 6 exs., 空港～祖納, 28. IV.-4. V. 2000.

空港～祖納間には生コン工場があり, ナイターの帰り水銀灯に集まったゴミムシ類, ゲンゴロウ類を採集した。敷地内はコンクリートが張ってあり作業中は水を撒くらしくゴミムシ類, ゲンゴロウ類はコンクリートの割れ目の小石混じりの濡れた砂の中にセメントにまみれて潜んでいた。

2. ホソツヤナガゴミムシ *Abacetus leucotelus* BATES (Fig. 2)

1 ex., 空港～祖納, 28. IV.-4. V. 2000.

3. チャイロヒラタゴミムシ *Dicranoncus plicator* (BATES) (Fig. 3)

1 ex., 空港～祖納, 28. IV.-4. V. 2000.

4. トゲバネゴモクムシ *Coleolissus (Coleolissus) azumai* HABU

22 exs., 宇良部岳, 9. VII. 1999; 5 exs., 宇良部岳, 1. V. 2000.

1999 年は宇良部岳下の小規模の伐採地で発電機を使用してのナイターで得た。どこからともなくスクリーンに集まる多数の見慣れぬゴモクムシに何ゴモクムシかわからぬままに採集した。2000 年は宇良部岳頂上付近の漁業鉄塔で発電機を使用してのナイターで得た。

5. アシグロアオゴミムシ *Chlaenius leucops*

(WIEDEMANN)

2 ex., 空港～祖納, 9. VII. 1999; 5 exs., 空港～祖納, 28. IV.-4. V. 2000.

6. タイワンアトボシアオゴミムシ *Chlaenius bimaculatus lynx* CHAUDOIR

1 ex., 空港～祖納, 9. VII. 1999; 1 ex., 空港～祖納, 28. IV.-4. V. 2000.

7. ミズモグリゴミムシ *Hololeius ceylanicus* (NIETNER)

3 ex., 空港～祖納, 28. IV.-4. V. 2000.

8. ヒトツメヒラナガゴミムシ *Hexagonia cyclops* (MATSUMURA) (Fig. 4)

4 ex., 空港～祖納, 27. IV.-4. V. 2000.

このゴミムシを小石の下より発見したときはノロノロと歩いていたが, 捕まえ損ねると急にゴミムシ本来のスピードで走る。それは, マダラチョウのようにゆっくりと飛ぶヤエヤマムラサキの♀を振逃がしたときと感じが似ている。

1, 2, 3, 8, は「原色日本甲虫図鑑 II」(1985) に与那国島の記録がない種。4, 5, 6, 7, は採集記録が少ないと思われる種。

参考文献

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 514 pp. 保育社. 大阪.
笠原須磨生, 1986. 日本産歩行虫ノート I: トゲバネゴモクムシとムネアカスジバネゴミムシの雄について, 甲虫ニュース, (72): 5-6.

(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○屋久島におけるオビハナノミ属 2 種の秋期の採集例

筆者は先に, 八重山諸島のイシガキオビハナノミの秋期における採集例を報告した(本誌, (100): 26)が, その種と同亜属の次の 2 種も秋期に採集されたので報告しておきたい。

- 1) サタオビハナノミ *Glipea (Stenoglipea) azumai* NAKANE

1♂, 鹿児島県屋久町尾ノ間鈴川, 23. IX. 2003, 久保田正秀採集, 筆者保管。

- 2) ハリオオビハナノミ *Glipea (Stenoglipea) hatayamai izuinsulana* TAKAKUWA

1♀, 鹿児島県屋久町尾ノ間鈴川, 3. X. 2003, 久保田正秀採集, 筆者保管。

前種は新鮮であったが, 後種は体の微毛を部分的に損じている。いずれもフキ葉上に飛来したものを得たもので, 同時期にさらにいくつかを日撃しているとのことである。

本属の種は, 日本ではほとんど夏期に得られてきた。しかし, 採集者の久保田氏によれば, 他にも屋久島で秋期に本亜属の個体を採集した人がいるとのことであり, また筆者自身も南九州で 8 月後半にサタオビハナノミなどが多数採集されたという情報を聞いているので, 本亜属の種は秋期にも活動するのが通常なのかもしれない。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

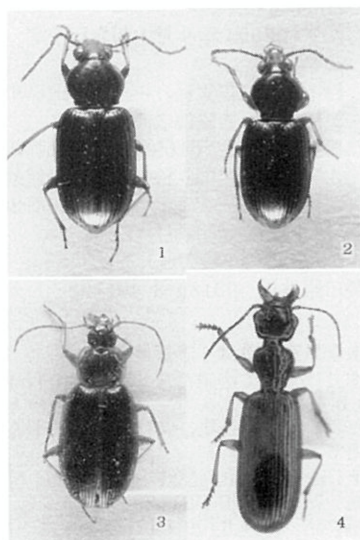


Fig. 1. ミナミツヤナガゴミムシ Fig. 2. ホソツヤナガゴミムシ
Fig. 3. チャイロヒラタゴミムシ Fig. 4. ヒトツメヒラナガゴミムシ

○沖縄島北部におけるネクマチジヒオドシハナカミキリの追加記録

ネクマチジヒオドシハナカミキリ *Paranaspia inadai* N. OHBAYASHI は、沖縄島大宜味村ネクマチジ岳にて得られた 1 個体に基づいて 2001 年に記載された種 (OHBAYASHI, 2001) で、その後の正式な記録は知られていない。筆者は基準産地と同じ大宜味村内で、以下のとおり本種の追加個体を採集したので報告する。なお、報告にあたり、本個体の同定、文献の供与および採集記録についてご教示をいただいた新里達也博士に厚くお礼申し上げます。

1♂, 沖縄県大宜味村大國林道, 28. IV. 2004, 筆者採集。

当日は快晴で、やや気温の低い爽やかな日であった。林道沿いに、開花していたアカメガシワをはじめとする林縁部をスィーピングしていたところ、午前 9 時 30 分頃に本個体を得た。なお、本個体がアカメガシワに訪花していたものかどうかは不明である。

引用文献

OHBAYASHI, N., 2001. A new species of the lepturine genus *Paranaspia* from Okinawa Is., Japan (Coleoptera, Cerambycidae). *Jpn. J. syst. Ent.*, 7: 95-98.
(東京都八王子市, 小栗太郎)

○神奈川県初記録のピックオビハナノミ

筆者は先に、日本ではそれまで福井県・三重県以西から知られていたピックオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) pici* ERMISCH が意外にも東京都高尾山に分布していることを報告した (本誌, (122): 9; (139): 19) が、高尾山と距離的に近い神奈川県域でも採集されたので報告しておく。

1♀, 神奈川県津久井町仙洞寺山, 19. VII. 2003, 永野 裕採集, 筆者保管

高尾山で得られた個体もすべて雌個体であるのは興味深い。

本個体は自然環境研究センターの兼子峰光氏を介して筆者の元に届けられた。採集者の永野 裕氏とともにお礼を申し上げます。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

○群馬県におけるムネアカクロメツキの記録

ムネアカクロメツキ *Ischnodes maiko* W. SUZUKI, 1985 は、北海道, 本州, 四国, 九州に広く分布する綺麗な種である。ケヤキやトチノキの古木の樹皮下で得られることが知られているが (大平・有本, 2001), 関東地方での採集例は極めて少なく、埼玉県と神奈川県かの記録があるにすぎない。筆者は、これまで記録のなかった群馬県で採集された個体を検することができたので、分布資料として報告しておきたい。

1♀, 群馬県水上町湯捨曾川, 6. VI. 2004, 川田一之採集 (筆者保管)。

採集場所は湯捨曾川沿いの道路で、広葉樹の生木の根元にとまっているところを発見し、採集したも

のである。道路は谷からの吹き上げになっている斜面にあたることから、飛行中のものが風に乗って運ばれてきたものと考えられた。本種は、広葉樹の根元がウロとなっているところに幼虫が入るため、そのような木の周りを探せば各地で発見される機会は増えると思われる。

末筆ながら、本種を採集された川崎市の川田一之氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

大平仁夫・有本久之, 2001. 福井県産コメツキムシ類の分布記録 (15). 福井虫報, (29): 31-34.
(東京都世田谷区, 鈴木 互)

◇標本交換のお願い◇

ドイツの Andreas HERRMANN 氏より、日本とその周辺地域のカツオブシムシ類標本と、ヨーロッパ地域のオサムシ類の交換依頼が来ている。同氏は、世界的なカツオブシムシの分類学者として有名であるが、実はアマチュア研究者であり、本業は別であるとのことである。アマチュアながらそのバイタリティーは素晴らしく、彼の HP (<http://www.Dermestidae.com>) を見てもその実力は判ると思う。興味ある方はぜひ直接コンタクトをとって頂きたい。なお、交換についてはオサムシ科以外にも交渉の余地はあるし、古い文献類にも詳しいようなので、知り合いになる価値はあると思う。

Andreas HERRMANN: Bremervoerder Strasse 123, D-21682 Stade, Deutschland (Germany)

E-mail: herrmann@coleopterologie.de

((株)環境指標生物, 吉富博之)

甲虫ニュース 第 146 号

発行日 2004 年 6 月 30 日

次号は 2004 年 9 月中旬発行予定

発行者 高桑正敏

編集者 鈴木 互 (編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館分館動物物研究部昆虫第 2 研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000 円 (一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6 号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社